

同氏の寮で首記が開催されて京阪神在住会員の外遠く岐阜姫路などからも馳せ集り二十人程が十分間演奏をしたあと旭岡師を囲んで宴に移り胸襟を開いて歓談、なごやかな一日を送った。(出席者) 松岡旭岡、秋元旭晨、伊藤旭暢、岩井華栄、梅原旭壽、大西旭明、大垣旭景、尾山旭瑞常、木庭旭山、岸原旭正、坂田旭弘、竹本旭将、田中旭昇、高千穂旭楓、竹村一枝、戸倉旭嶺、富樫旭桂、中島旭穂、中西四郎、中沢喜久野、西川旭操、西尾雄二、能勢旭陽、榎本旭風、松岡旭文、美登里進水、樋口旭絵、以上二十七人

日本琵琶振興会 一月二十八日(日)一時一
新春初会合 八時東京新宿一丁目洲風会館。昨年中千駄ヶ谷の鳩森八幡宮社務所を定席として行われた本会の月例懇親研究会は本年から旧臘落成の洲風会館(山田洲風師経堂)に移し定め、茲に改めて過去七年間の歩みを回顧し今後の運営方を種々検討しつゝ本年度中に改良を重ねて確固たる「会」の方針を樹立しようとするその目的を、第八年目初会合の表題として参席者五十五名にて相変らず和やかに催されたが、芹沢百華、水藤錦穂師等を首めとするレギュラーメンバーの他に藤巻旭鴻、新納岳窓、田中旭嶺師等の珍しい顔も見えて新春に相応しい賑かさであった。

次回(二月二十五日)は先づ五十七名の演奏者と演目を決めて之を案内状に記載し斯の畑の外部の聴客を募ってその反響に耳を傾けよう、と云う。直ちに成果を望めずとも同人達の努力によって徐々に其の目的を達成し得れば斯道の為慶福すべく、又振興会の名も生きる。(東京通信)

壽初春公演 二月四日(日)午後十時半から琵琶と演芸 大阪難波高島屋ホール、主催八千代会・共賛和鶴会。かぐや姫・宮垣、沖繩特攻隊・鏡山・谷口、花の白虎隊・多和、湊川・高橋、森蘭丸・中西、天の羽衣・青柳外、華道吟・苦外、雪晴れ・堀田紫月、衣川一団野旭兜、茶道松風の曲・旭蓮外、堅田落一壺谷旭洲、妻ごめ・天津八千代、井伊大老一寺尾旭吉栄、若き敦盛・大石旭運、由比ヶ浜一矢吹華水、勤進帳・堀田旭甲、長唄共演、ふるさとの心・和鶴会。外に尺八、古典落語、古典万才、小唄、日舞曲などの催して聴衆を喜ばせたが特に「勤進帳」は琵琶甲心会長堀田旭甲、長唄三味線梓屋志津松岡師の共演で堂々四十分の巨る熱演に満場を魅了した。

森 鶴堂氏 静岡赤心流吟詠琵琶の家元 改 号 (月刊「静岡の考」主幹)の同氏は今般「赤心流鶴翁」、ペンネーム等は「森梅翁」と改名された。

大滝旭雄氏 旭萃会・京都琵琶協会員の同氏は長い闘病生活の後旧臘二十四日食道癌のため逝去、翌二十五日葬儀が営まれ琵琶人多数が参列焼香した。享年五十一。氏は琵琶の外三絃その他の邦楽に堪能又洋楽器を良くし多芸に通じていた。謹んで哀悼し御冥福を祈る。

一(子) 告

- ：田中鵬水氏テレビ放映 三月一日(日)午後〇時十五分近畿TV「私のコレクション」で琵琶五十面を蒐集した苦心談を放映
- ：緻水会春の会 三月四日(日)大阪天満天神門前、朝陽会館(主催広瀬緻水氏)
- ：各派交流名人演奏大会 三月十一日(日)昼京都四條山一証券ホール(別項参照)
- ：京都琵琶協会三月定例茶話会 三月十七日(日)午後一時南区吉祥院中島町三〇ノ八九會員矢吹華水女子宅(電話六九一〇一〇二八)
- ：研精会演奏会 三月二十四日(日)出屋東京日本橋第一証券ホール(別項参照)
- ：晴風会演奏会 三月二十四日(日)昼東京杉並区立高円寺会館
- ：日本琵琶振興会三月例会 三月二十五日(日)正午、東京新宿一丁目洲風会館

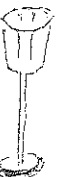
昭和四十八年三月一日発行(非売品)
編集者 植 村 真 水
発行所 京 絃 社
〒569 高槻市津之江北町一ノ二二三
電話(0726) 八五一六〇五一番

琵琶 機関紙

京

絃

第二二五号 京 絃 社



薩摩琵琶の真髓と今昔観(二)

幽玄なる音色とその解釈―混奏を嫌う琵琶―叙事詩平家物語の登場

東京 坂 本 錦 道

古来、琵琶の持つ音色に対して色々な形容の言葉が沢山用いられて来たが、中でも「幽玄」という言葉が一番多く用いられている。言海を繰り見れば「奥深く容易に知り難い」と出ているが、いますこしこの言葉の内容を分析すると、美の最高の理念とするものは、優美とか優雅と云ったような基本的美より、心情を湛えた複合的の静寂の美となり、形而上のかの芭蕉の云う「さび」に関連性のある枯淡な美を指しているものが、幽玄と解してもよいかと思われる。

そこで明治、大正の高名な弾士の話の中に、琵琶がその幽玄な音色を発している時は、如何なる演奏者でも自身の咳払いすら大雑物である、と云っているが、それほど余韻と静寂というものを重視し、且つ大切にされたかを窺い知ることが出来る。

一つの規則の範囲に支配される西洋音楽のように、琵琶の弾法には一拍子の狂いもなく、整然とした楽譜楽典というものがあられるわけ

もなく、古来より耳から耳へと伝承されて来たが、然し何時の間にか不完全ながら楽譜らしいものも出来、約束と目鼻口作りの定石というものも生れて来たもの、それによって著しく拘束されるというものでもなく、寧ろ極めて潤達にして自由な天地が存在している事を知らねばならない。

琵琶楽器は西洋音楽者流の眼より観れば確かに不完全楽器であろう。他の邦楽の如く鳴物囃子と混奏するということは極度に嫌悪するといふのも、その生命とする静寂と余韻が全く価値なきものとなる懸念があるからである。一面の琵琶、一挺の撥から発する幽韻は、かの白楽天の作「瀟陽江」に余すところなく記述され、楽風は古雅にして神韻を生じ、精神の修養が必然として帯びて来る、洋楽や他邦楽と比べてもないのである。

さて茲で簡単に日本に伝わった琵琶の歴史を回顧すれば大体三つの回路がある。その一つは我朝に於ては定かな文献に乏しいけれど

も、奈良朝の頃雅楽の中に地位を占めたが、それはそれなりに雅楽の中に定着して、一般庶民から隔絶された特権階級の中に、貴族趣味として珍香も焚かず屁もひらずと云った所で、国家の手厚い保護を受けて今日に至る。

今一つは雅楽の中から分流して、武士階級の中に拡がった平家琵琶と称するもので、平家の公達が花の下なる風月の遊びに無くてはならぬものであったが、平家滅亡後は日本の国土から概ね姿を消したと思われた。惟うに芸道というものは、時代の庶民や若年層より見離された時は滅亡するという一つの鉄則があるが、少くとも庶民の中にも入りきれなかつた平曲はみじめなものとなった。それでも平曲の伝承は極く一部にあったと見え、昨年仙台にこの平曲の研究者が居てテレビ放送をされた、仲々高尚にして典雅なものと思われた。

そこで最後の一つは、宗教の用具として発達して来た荒神琵琶である。俗に云う琵琶法師の手にあったもので、概ね盲僧が生活の糧を得んがため庶民の中に融け込んで展開された物語琵琶である。源平の戦によって平家の潰滅後四、五十年を経過して、国文学上重要な地位を占める「平家物語」が叙事詩体的作品として登場して来たが、いつの間にか盲僧達の手によって採り上げられた。その物語は雄大なスケールの中に悲壮惨絶と哀愁が渾然と織り込まれ、

後世に於て識者は世界に比類のない立派な文
学的作品であると高く評価されているが、之
は単なる読み物でなく琵琶の盲僧法師が特有
の読経の曲節を入れて街から村へと人々に語
り伝え、琵琶は庶民の中に脈々として成長を
続けた。

茲で余談を申上げて恐縮であるが、私は大
正十二年、幼少の頃からお寺で育った西田長
祐師の門にあって、師は「滝口入道」を私
に教えるに当って、この曲中に清盛と重盛の
戒名を読むくだけりが最重要点であると私に注
意された。その一節を申上げると

「琵琶というものは坊主のお経の節より始
まり、足利時代当時の能劇の『謡』の曲節
に非常に影響を受け、薩摩に入るに至って
同地の方言訛が入り交って一つの骨格が出
来上り、東京に入ってゴツゴツした所の角
が大部取れたが、東京人は芋節などと悪名
を付けた。所でこの滝口を謡い上げる重要
点は、戒名のくだけり五行は読経式に地の
中下を最も巧みに使い分ける、私が坊主上
りだから云うのではなく、少くも地のしっ
かりせぬ琵琶は未だ本物でない。」

という注意であったと記憶している。それか
ら間もなく西田師はNHKのラヂオ放送に
「伊豆の御難」を出された時、宝塔品の偽文
のくだけりを台本以外に長々と巧名な地を読経
式にやって、唄入り観音経ならぬ唄入法華経
を謡い上げて当時のフアンを沸かせた。
(未完)

狂醉亭漫録 (第八十八)

赤穂義士の最期 (三)

古谷 寛 水

高輪細川邸の一党の居室二間には此朝二個
の活花が飾られた。朝から殊に入念の御馳走
乃て一党に入浴をとの事。今日は越中守殿来
臨とあって悉く衣服を替えられた。午後から
邸内は何となく物々しいが、一党は固より覺
悟の体で、談笑は少しも平生に異ならぬ。

時刻稍移れば例になく極めて早く夕食を供
せられた。一党はそれと察し手早く之を認め
了る。時を計って接伴係の八木市大夫から、
「前刻来御上使御来臨にお坐れば御召物御改
めなさるよう」との事、小坊主は浅葱無垢の
麻袴、黒羽二重の小袖上下等を夫々の前へ取
出した。一同は「畏っておさる」と挨拶し、
着替えて整々として上の間に集り、内蔵助を
上坐に一列となり厳然として着坐した。

此時内蔵助は活花を見、御預の身として餘
りに緩急と思ふたか、接伴係に向い「お花は
最早御取除け下されたい」と求めたので、早
速其意に従われた。乃て上使の来臨は報せら
れ、御目付荒木十右衛門、御使番久永内記は
役者の間へと入られ、細川侯の近習は其後
ろに引添うた。一党は何れも平伏する。四辺
にはしはぶきさへ聞えず、只管屏息して御沙

汰を待受ける。十右衛門は一党に向い
「御上意ぞ」と声を掛け、「浅野内匠頭
儀、勅使御馳走の御用被仰付置候処、時節柄
殿中をも不憚、不届之任方に付、御仕置被仰
付、吉良上野介儀は無御構被差置候処、主人
の仇を報候と申立、内匠頭家来四十六人致徒
党、上野介宅へ押込、飛道具等持参、上野介
を討候始末、不恐公儀候段、重々不届候候。
依之切腹申付者也」と宣告し、内蔵助初め十
七人の姓名を一々読上げられた。一党ハッと
畏る。稍あつて内蔵助少し頭を上げ、「如何様
の重科にも処せらる可き処、すべ好く切腹仰
付られ、有難き仕合せに存じ奉りまする。」
とお受した。

此時御目付は公務既に了るといふ態度で、
「内蔵助とは昨年赤穂にて面談以来、交つた
場所にて対面致すな」とは、如何にも有情の
言である。「御意にお座りまする」と答えれ
ば十右衛門は重ねて「是は自分一存にて話し
置く。吉良左兵衛事、此度の仕方不届に思召
され、領地御召の上、諏訪安芸守へ永の御預
と相成つた。左様含み置かれるように」と告
げられた。内蔵助の満足如何であつたらう。
「さてはさては、誠に本懐の至りに存じ奉り
まする」と述べるを聞き、上使は立ち上つた。

其直後、接伴係宮村団之進、長瀬助之進は
越中守の内意を承けて入り来たが、何れも誠
に落胆の体、団之進は内蔵助に向い「此度当
家の方々を御預り申して以来、主人には何卒
御一同へ吉左右をお聞かせ申したいと、種々

に心を碎かれた甲斐も無く、残懷至極に存せ
られます。事今日に至って是最早詮方もお
ざらねば、心静かに支度せられるよう、主人
申付の旨をお伝え申します」と告げた。

内蔵助は感涙を湛え「旧臘以来今日に至る
まで何から何までお手厚き御取扱、誠に言葉
にも尽し切れませぬ。只管有難く御礼申上奉
りまする旨、何卒御前へ御取次を願上げます
る」と一礼し、「殊に今日切腹の御沙汰、武
士の冥加に協いたる次第、面目此上はおざり
ませぬ。但だ此度の一挙は、何れも内匠頭扶
持を受けましたる同家中、主人の鬱憤を散じ
たいとの一図に出でましたのみで、一人も他
方の者を加えませぬ。然るを徒党いたしとの
御沙汰、是のみは心外に存じまする」と言
了って微笑を漏らした。内蔵助は乃て人々を
集め、越中守の内諭を一党に伝へれば一党も
亦感激し、接伴の諸士に向って深々と感謝し
た。斯くて皆其座を立ち、思い思いに手洗
い口漱ぎ最後の一命を待ち受けた。

「さらば土語を参らせう」と直ちに銚子は
取出された。烈士の最後の盃にあやかるうと、
接伴係の人々は我も我もと盃を所望する。其
間から堀内平八、堀七郎兵衛は一党に向い、
「方々の御遺書もお座ろうと存じ、御目付
まで伺出ました処、内見の上宛名もあらば、
夫々へ届け遣わせとの御沙汰、御遠慮なく御
書き置きなされますよう」と申聞け、堀内
伝右衛門を呼び「幸い貴殿は方々とお心易い。
御銘々に伺われよ。」と料紙さては硯箱を小坊

主に持出させた。伝右衛門は心得てまづ内蔵
助へ勧めれば、彼は一党を顧みて「段々の御
懇命千萬恭くは存じます。此期に及び何
れも何の申残す事がおざりませう」と最早筆
を取らうともせぬ。一党も亦同様であつた。
嗚呼今日あるを期する事既に久し。今亦何を
か言わんやとの概、一層涼しく見受られた。

伝右衛門心に背き個々談判に入つた。まづ
内蔵助に「何なりと仰置かれる事がおわさば
身に引受けてお通じ申さう」と云へば大石は
「さ程迄に仰せられるなら拙者の従弟に大西
坊と申すが城州八幡に住します。是へお序
に、今日の被仰渡と申し、又晴々したる天気
と申し、快く死に就いた旨、仰聞け下され、
次男が許へも通ずるよう、御伝言を……」

次に吉田忠左衛門も同じ意味を「縁者伊藤
十郎大夫へお話下さるよう」と云つた。
原惣右衛門の母刀自は彼の尽忠を激励する
為に夙に自害したのであるが、彼は今之を思
い浮べ、今朝一首の辞世を留めた。曰く

かねてより君と母とに知らせんと

人より急ぐ死出の山路

彼は大石の書記役であつた為、内蔵助の名を
以て同土内海道徳宛の大封を委託した。

片岡源五衛門は「拙者の祖先備前以来伝来
の朱柄の鎧を泉岳寺へ残し置きましたれば、
遺族の者へ遣はしたく、宜しく」と頼んだ。

間瀬久太夫は昨今の腹下しを訴えたので、
「其は御念の入つた事。お氣遣い御無用、委
細心得ておさる」と云へば満足の体であつた。

(以下次号)

“青の洞門”

越後の旅僧禅海のノミの跡

辻 旭城



四月はじめ、南国九州では既に桜が満開と
いうのに、耶馬溪に吹く冷たい風は岩にぶつ
かり無気味な悲鳴を上げていた。琵琶歌で伝
えられる行きつりの僧が苦節三十年、念仏と
血と汗で廻りぬいた青の洞門、その奥から今
もなお禅海のノミの音と念仏が聞こえて来る
ような気がする……

国鉄別府駅から乗った山なみハイウェイバ
スは空いていた。ゴツゴツとした火山岩が露
出する地肌と、野火で焼かれて黒ずんだ枯れ
草。車窓にうつる景色はややくこしく、箱庭の
美しさとは凡そかけ離れたものだった。

別府を出て約一時間半ほど乗つたであろう
か、長者原という停留場でバスを降り、おん
ぼろ定期バスに乘継いで漸く辿りついたのが
筋湯温泉・神経痛によく利くところからこの
名が付けられた。十軒足らずの温泉宿が山あ
いの猫の額ほどの場所に肩を寄せ合っている。
麓の別府よりこの九重高原は、四度も五度も
気温が低く、五月一ばいストーブを赤々と燃
やすという、九州での数少ない納涼地帯の一
つで、四月始めは勿論シーズンオフで人影は
まばらであつた。

宿に着いて早速内湯へ飛び込む。冷え切った五体にしみ渡る温泉のぬくもりほど有難いものはない。御師が湯治場に使ったというこの温泉は、まだまだ関西人には知られていない。

よい気分になって部屋に帰ると「こんな淋しい所になぜ一人で来たかね？」お茶と菓子を持って来た女中さんが不思議そうに尋ねる。別府あたりで泊ればいゝのに、と云った口ぶりである。

夕食に出たのはワラビ、ゼンマイ、シイタケと総て地元の山菜料理。それに名産長者梅、焼酎漬の梅の実が淡白で噛むとシコシコする。から口の地酒にビツネリのつまみなのだが、女中の運んで来た地酒はいやにぬるかった。

「ねえさん、もう少し熱燗にして貰えませんか」というと「上欄にしますと辛すぎて都会人の旦那さんにはお口に合わない」と云う。仕方がないのでぬるい地酒の味を楽しんだ。

温泉のぬくもりと地酒の酔いとでぐっすり寝込んだが、翌朝部屋の冷え切った空気で驚いて目を覚ます。窓越しに見える雄大な阿蘇の山々は真白だ。阿蘇は新緑から紅葉の頃にかけて見ごろといわれ、観光客で賑わうのもこの頃である。「四月に入って南国九州で雪とは珍らしいね」と女中さんに云うと「こゝは冷たい風の吹く所で雪は珍らしくなかと」と笑っていた。

(未完)

各派 研精会

錦 穂

戦いの焦土にたちて琵琶鳴らし
我らは若き血汐たぎらす

悠かにも高鳴れ琵琶の音と叫び

同志集いて会名とする(新巻巻巻会)

琵琶歌に限界はなしと次々に
新作もの才歌人大沢逸足

糸川丁次、江風生かす作風に
意気高くして時代をにやう

口惜しやああ悼しや渡辺旭清、大沢逸足
平田旭舟、糸川丁次、山口祖水みまかりぬ

月に雲花に風と歌ひきし
この世の無常まざざしりぬ

品ありて艶あり絃も鮮やかに
忘れぬ佳人旭晴の面輪

低音の韻き冴えたる旭舟の
芸をたゞえし三味の宮染

の安定感と、以前にも増してグンとその中
出てきたことは、これから先きが期待される
新人だけに、まこと頼もしい。

また、村木桜柳師の「須磨の教盛」は、旧臘十二日のNHK放送の折も聴いているが、昨年八月ご夫君の死という精神的ショックから完全に立ち直られて、須磨の浦波、風をきいての語り出しから、終始ゆつたりとした態度は水藤一門の老練として、いさゝかの危惧の念をも抱かせぬあたりは流石である。このあとの「小松の操」池野谷吟岐、「大楠公」田中旭嶺は、ヤボ用(来客のため)で、やむなく中座。

新巻巻水さんの「大高源吾」を始め、原島旭艇師の「皇女和宮」、友吉澄水さんの「雪の進軍」並びに仲川秀邦さんの「白虎隊」などは、流石にこの道一筋の何れ劣らぬベテラン揃いとあって、場内のあちこちから盛んな拍手と声援が乱れ飛び、その人気?の程が知れようというものである。

更に引続いて藤巻旭穂師の「対王丸」、「常盤御前」の桑名洲聖、正絃会の重鎮たる遠藤鶴東師十八番の「鉢の木」、そして林田旭城さんの「羅生門」と名演奏が行われたが、とりわけ初めて耳にする林田さんの羅生門は、その語り、声量、弾法とも、まこと、お見事の一言につきる。

いゝものは何度聴いてもよいものである。その、よいものと云えば「近時、好んで」戦記物」を弾じることによって自らも若返り?大いに万丈の気を吐いているのが、正絃会の宿

しみじみ胸にひびきしと昔子がいう
旭舟のレコードそつといたわる
寂もあり又艶もある祖水の芸
好しと云いたる新巻の人

友あまた失いて我ら心なえ
しばしうつろに月日重ぬる

親は老ゆ子らは育ちて芸心
受け継ぎ琵琶をかき鳴らす音

中絶へし年は云わなく二十五年
心離れず同人の志

「二十五年」記念の会を催すと
心若やぎ今日も集まる

演 奏 会 予 告
時・三月二十四日(土)午後一時~六時
所・東京日本橋三越前 第一証券ホール
各派 研精会
琵琶
錦司・江風・錦穂・錦穂
耕水・秀邦・旭鴻・外
ゲスト 田中 鵬水(京都)
矢吹華水

老たる古家絃風師である。
「この日の「彰義隊」もその一つで、全身これ闘魂」と云った気迫のこもったその熱演は、これまた広い場内を沸かせて、
「古家ッー」
「絃風さん!」
などと、黄色い「声援」がしきりに飛びかきまこと嬉しい限りである。
また、「禪師と正宗」の押川旭葉師、「曾我兄弟」の竹下翠風(小絃)、広瀬翠紅(正絃)両師のそれは、何れ劣らぬ力の入った熱演で大変結構であるが、演奏中その左手の光り物(指輪?)は、場所柄如何に女性の身とは云いながら、これはやめて貰いたい。
余談ながら、小唄の会などでも時折り見かける、羽織をまとったまゝ出るやば天と同様何とも苦々しい。

そして、お止めは「錦」の宗家水藤錦穂師の「景清」だが、その前日NHK放送の「時雨曾我」と共に、名実ともに一級品と云えよう。俗に「真打ち」は後から出るものよ、と云うが、まさにそれである。

「景清」と云い「時雨曾我」と云い、宛然、源平の昔の屋敷に於ける史上名高き「鏝引」或いはまた建久三年、折からの五月雨の夜陰に紛れて、見ん事亡父河津三郎祐泰が十八年の雨津風、仇きの工藤を討取った曾我物語の一コマコマが、彷彿として眼のあたり見ることが如き想いがして、この一曲だけでも十分に来聴者の多くは心から満足したものと云う次第である。一月十七日夜記(邦楽評論家)

新春恒例

「名流琵琶楽大会」を聴いて



早乙女千秋

初春の風麗らかな正月十日。松飾りこそ除けたが、いまだ屠蘇の香がほのかに漂う東京は日本橋の三越劇場に於て、新春恒例の「名流琵琶楽大会」(東京新聞主催、協賛日本琵琶楽協会)が、午前十一時から賑々しく開催された。

出演者は、当日一番手の「娘みゆき」林田旭史から殿りの水藤錦穂師まで二十三名という豪華な顔ぶれで、その内訳は「筑前八名」薩摩七名、錦心流五名、錦三名だが、このうち筑前の青山旭光、薩摩の鈴木鶴岡、錦心流の前田洲月の三師が病氣その他の都合により休演されたのは残念……。

が、当日は折からの好天に恵まれて客の出足もよく、正午過ぎには早くも七、八分の入りで、まづはさい先のよい目出度さである。ところで、大会の先陣を承ねる林田旭史さんの「娘みゆき」は、先づ先づと云ったところ。

次は「静」の宮崎州香さんだが、昨秋の新人コンクールに再度出演の甲斐あって、見事第二位(第一位は押川旭葉師)の栄冠をかち得た実力もあり、この日の「静」は気負いもてらしいもなく、淡々たる演奏の裡にも一つ

“三美会”春の大演奏会



矢吹華水、田中鵬水両氏主宰の三美会は毎年一回地元友友の外、全国一流の琵琶人を招聘して大会場で演奏会を開催し、昨年は定員四百五十名の京都府立文化芸術会館を満員にしたが、今年は趣向をかえて、各流派琵琶の女流のみの名人会を三月十一日(日)午前十一時半から京都四條堀町の山一証券ビル六階大ホールで開催が決定し、水藤錦穂、山崎旭萃兩名人を始め、東京仲川秀邦、原島旭粧、広島菊地旭蘭、神戸三浦蓮水、柴田旭堂、姫路西川旭操、大阪藤原英水、中山鳳水、高千穂旭楓、彦根林田旭城、大津伊藤旭特、京都矢吹旭美津、梅原旭濤その他の諸名師がそれぞれ得意曲を熱演して研を競う筈で、当日の盛況が予想される。

(月刊「伝統芸能」から) 関西の女流琵琶奏者、矢吹旭美津、梅原旭濤、林田旭城、三浦蓮水、藤原英水、中山鳳水の六人が結集して新しく邦楽運動を展開しようとして此程京都で会合をもち、とりあえず今春三月十一日山一ホールで開かれる三美会第五回演奏会に東京から水藤錦穂、仲川秀邦、原島旭粧、大阪から山崎旭萃のゲストを迎え女流ばかりでリサイタルを開くことになった。

平家物語ブームもあって琵琶は最近人々の関心を集め、特に日本の心を語るものとして若い人にも親しまれて来たが、女流ばかりの演奏会は初めて。これを機に他の師範にも呼びかけ、流派を超えてその発展をねらっている。

の操、池野谷吟地、大楠公一、田中旭嶺、高源吾、新部桜水、皇女和宮、原島旭粧、雪の進軍、友吉澄水、白虎隊、仲川秀邦、対王丸、藤巻旭鴻、常盤の前、桑名洲聖、鉢の木、遠藤鶴東、羅生門、林田旭城、河内尉、柏木、道、禪師と正宗、押川旭葉、勸進帳、小沢、錦弥、彰義隊、古家絃風、曾我兄弟、広瀬翠、紅、竹下翠風、景清、水藤錦穂、新部桜水、藤波桜華、城山、大塚岳峻

赤穂義士を偲ぶ

十二月十七日午後一時 琵琶演奏大会 札幌市北神会館、一水会 札幌支部、札幌紅水会共催、月下の陣、西条幸岳、静、八木田岳秀、白虎隊、木村岳豊、紅葉狩、石沢武水、木崎原、沢田竹水、西郷隆盛、町田柏水、舟井慶、阿部薄水、松の廊下、木村紅龜、草薙亮水、本能寺、安達弦水、重衡、大友城水、山科の別れ、黒木照水、井上洋水、別れの盃、小幡雄水、松永育水、敦盛、加藤夕水、桶狭間、広川岳楓、常盤御前、渡辺飛水、赤垣源蔵、若林鳳水、松浦の太鼓、室谷幹水、山崎紅水、雪晴れ、小林瀧水、大野徳水、二反田岳水、外に樋口冠水、八木田洋秀、林尚水、槍森毅水、西条幸流各氏出演

琵琶楽

一月十日(日)午前十一時東京日名流大会 本橋三越劇場、主催東京新聞、共催日本琵琶楽協会、娘みゆき、林田旭史、静、宮崎洲香、須磨の敦盛、村木桜柳、小松

菅沼馨水氏一水会 一水会名古屋支部は名古屋支部長に就任、昨年九月前支部長稲葉葵水氏の逝去以来空席の儘となっていたが去る一月の同支部総会の席上衆望を担って菅沼馨水氏が新たに支部長に就任された。菅沼氏

は人も知る錦心流の古参者で芸技拔群且つ濃厚篤実の君子であり又敏腕家として各名高く同支部今後の発展が期待される。(名古屋市昭和区塩付通一ノ三五 電話七六一一四七〇 八番・千四六六)

大阪琵琶同好会

例年通り一月十五日午新年懇親会 後一時から近鉄上六会館あすか料亭で広山後援会長の送別会を兼ねて首記開催、当日は朝からの雨にも拘らず多数出席され和氣霽々の裡に色々話題が出たが、我々は飽くまで流派的自己主義を捨てて協力一致琵琶楽の発展と平和日本の為に努力する事を契り合ひ盛会内に五時散会した。

(出席者) 藤野鳳嬢、宮之原聖水、養老駿水、広山米男、田中良雄、島津旭都、北野旭山、中山鳳水、川村幸三郎、恵坂星聖、米原星智、矢野旭信、辻旭城、水谷旭南、寺尾旭吉栄、大西旭明、若宮旭登、石橋旭嶺

晴風会

一月二十一日(日)午後一時、新春演奏会 七時東京杉並区立高円寺会館、主催浅野晴風会。羽衣、浅野晴風、設楽ケ原、大関英子、吟桜花の詞、河西青山、吟祝賀の詞、西野青清、河内の宿、竹内青寿、常陸丸、本橋錦風、吟近江八景、佐藤青苑、門出、森田青芳、春の調べ、坂入晴峰、月下の陣、原島晴洲、俊寛、萩野甲水、羅生門、青木晴城、舟井慶、加藤錦陽、河内島、山口豊水、吟、渡辺萩草、吟鉢の木、中村松声、敦盛、

山崎典水 宮本武蔵、杉山雅俊、吉野落(下)、若林晴凌、泊り舟、望月岨江、平知盛、山下晴楓、安達ケ原、鈴木流泉

錦びわ新春

一月二十一日(日)正午 弾初会・新年宴会 東京本郷三丁目菊屋ビル三階和室、主催水藤宗家、門弟達一堂に会して正月弾初会で楽しんだ後來賓数氏を迎えて宴を開き新春の半日を満喫した。推葉の月、新部桜水、黒田武士、藤波桜華、しぐれ曾我、水藤五郎、勿来の関、藤本露風、曲垣平九郎、林穂豊、青葉の笛、沢みどり、桜狩、小島千太郎、月下の陣、小室俊、故郷の道、三好美代子、香炉峰の雪、松井きみえ、五条の橋、木原綾子、須磨の敦盛、村木桜柳、無題、津谷桜佳、練習曲、ロナルド・マックレイン、城山、中村信幸、小督、水藤錦穂

老人慰問

大阪琵琶同好会、大阪市諸芸新春大会、立東住吉老人福祉センター共催の首記が一月二十一日(日)午後一時から加美町のセンター演芸場で開催され三百余の男女老人が参集して左記琵琶の外寺尾旭吉栄女史の長唄、島一郎氏の奇術などで新春の半日をなごやかなムードに包んだ。常陸丸、藤野鳳嬢、天の羽衣、養老駿水、黒田武士、島津旭星、秋風故郷山、吉川正風、大楠公一、宮之原聖水、北の庄、矢野旭信、粟津の露、辻旭城、山吹の夢、秋口旭伝、那智の荒行、大西旭明、西郷隆盛、中山鳳水、姫ゆりの塔、石

橋旭嶺、貧者の一灯、美登里進水、綱館、寺尾旭吉栄

武 絃 会

一水会多摩支部 合同研修会 武絃会第九支部第二十三回の主記を一月二十一日(日)午後一時から小金井市福祉会館で開催し左記順演の後新年宴会に移り七時賑やかに散会。夢、篠宮緑水、菅公、工藤琢秀、吹雪の敵、高杉洲晴、本能寺、押谷若水、井伊大老、中島澤水、須磨の春、石井效水、雪晴れ、伊藤馨水、彰義隊、清水源城、山科の別れ、中村修水、旅順開城(上の一)、大村鼓城、同(上の一)、坂本錦道

第八十回義士祭

一月二十八日(日)午後一時、新春琵琶演奏会 時大阪天神筋朝陽会館、主催憲水会、当日会場に堀部安兵衛の絶筆を展示して多数聴客の興味を引いた。会津白虎隊、金寄吟呂、井伊大老、小西甫水、山科の別れ、小川吟水、武士の意地、菊地庸子、小督、伊勢谷安江、敦盛、久内舟水、鉢の木、木村蓮水、白虎隊、宮内玲水、城山、杉秀夫、宇治川先陣、藤原英水、元冠、平井春嶺、天野屋利兵衛、吉野洲水、赤埴別れの盃、広瀬敏水、静、蔵本司水、本能寺、岡部錦葉、雪晴れ、東意水、外に詩吟四、舞踊三

松岡旭岡会 一月二十八日(日)午後から、新春懇親会 戸倉旭嶺氏の斡旋で大津市の